

# 歴史探訪

## クラブ

其の  
94



History Inquiry Club

文化振興課 ☎23局 3635

FAX 22局 3811

### 渥美半島の文化を支えた斎藤専吉

渥美半島の伊良湖岬は、和歌や歌枕にも詠まれる景勝地として有名です。松尾芭蕉の歌の地を求めて、明治時代以降、多くの文化人が訪れています。今回ご紹介する斎藤専吉は、渥美半島とそれらの文化人との架け橋となった人物です。

斎藤専吉は明治11年（1876）、福江町に生まれました。明治32年（1961）に清田尋常小学校（清田小学校）の教員となり、亀山尋常小学校（亀山小学校）を退職するまで



▲亀山町の専吉の自宅前  
（後列中央が清野、左端が専吉）

教員生活を送りました。その後、福江町助役、愛知県民生委員、亀山保育園長を務め、昭和33年（1962）に死去しました。専吉は短歌や俳句、郷土史などの研究を進め、その見識や人柄を頼って、多くの文化人が渥美半島を訪れています。多くの文化人と交流した専吉は、渥美半島の文化レベルを上げた功績がありますが、特に注目したいのは、考古学上の功績です。渥美半島の考古学上で最も有名なことは、縄文時代の人骨の発掘です。京都大学の清野謙次（1885～1955）により行われたこの発掘は、当時の日本では衝撃的なニュースとして伝えられ、渥美半島は考古学上でも注目される地となりました。

最後に、考古学者と専吉との交流を示す写真をご紹介します。保美貝塚の調査に、日本陸軍の創成期から日露戦争にかけて活躍した軍人大山



▲清野の吉胡貝塚調査30周年記念で撮影された写真  
（左から清野、専吉、清野の弟子で南山大学の中山英司、田原の伊奈森太郎／吉胡貝塚にて）

（1922）に自ら発見した川地貝塚（当時は亀山貝塚）を発掘させました。清野は、この発掘を機に快進撃を始め、吉胡貝塚や多くの古い人骨の発掘を行いました。そして、それらの発掘の研究をまとめ、人類学者としてのゆるぎない地位を築きあげたのです。もしも専吉の存在がなかったら、考古学の宝庫である渥美半島の名も、人類学者清野謙次の名も残らなかつたことでしょう。清野は専吉への恩を忘れず、生涯交友を続けました。

元帥の息子である大山柏が来郡するということで、渥美半島中が大騒ぎに。当時、大山柏の隣に座ることができたのは、大変名誉なことだったそうです。



▲保美貝塚の発掘現場（前列左から4人目が考古学者大山柏、左が柴田常恵、右が専吉）

※斎藤専吉の日記「撫石荘日乗」は、田原市図書館でも見ることが出来ます。  
（増山）

### 今月の「表紙」

▼渥美半島に早春の訪れを告げる菜の花。菜の花の花言葉の一つに「快活」があります。満開の菜の花畑では、写真を撮る方も、撮られる方も笑顔に。もしかしたら、菜の花から元気をもらっているのかもしれないですね。皆さんも、菜の花畑へ出かけてみてはいかがでしょうか。(O)

【表紙の写真】福江保育園前の菜の花畑